〈読むこと〉への接近

国語教育講座・助教授
日高　佳紀

■読むことの意味

たとえば国語の授業で、「君の解釈は正しくない」ナドと言われてショゲた経験はありませんか。あるいは逆に、「国語は答えがひとつじゃないからツマラナイ」と思ったことは？

しかし、そもそも小説や詩の読み方に「正解」なんてあるのでしょうか。読むことに〝正しさ〟があるとしたら、それはどういうことなのでしょう。

研究室所属生と

■文学研究の現在

私の専門は日本文学、特に明治期以降の近代文学を扱っています。あらゆる価値が相対化される現在、文学もまた例外ではありません。従来、作家の個人史や作品の成立事情を中心に進められてきた文学研究が、現在は、文学の価値それ自体を問うことなしには成り立たないものとなっているのです。

このような立場に私たちが身を置く時、「今なぜ文学を読むのか」といった、読者として文学に関わろうとする自らへの問いを発することになります。

■研究から教育へ

近代文学研究室に所属すると、まず、文学研究をめぐる様々な理論を学び、文学にアプローチする方法の多様性を学びます。同じ作品でも、切り口によって全く別の様相のものになるということを知るところから始めるのです。

それによって、たとえば、ある作品が「名作」とされているのも、特定の時代や社会の枠組みから得られた評価にすぎないということに気づくことができるでしょう。そしてそれは、教師として教壇に立つ時、生徒一人ひとりの〈読むこと〉の価値を見出すことにも繋がるはずなのです。

規制緩和と資源配分

社会科教育講座・助教授
森　伸宏

■資源配分の重要性

経済学は、人々のさまざまな欲望を満たすために限られた資源を効率的に使うにはどうすればよいのか、という資源配分の問題を扱う学問です。ここで資源とは、生産物の生産に必要なもので、人間もそのひとつです。

資源は有限なものです。だから何を生産し、それを誰に配分するかが重要な問題なのは明らかです。

そして、効率的な資源配分を実現する方法として知られているのが、市場メカニズムで、近年、世界中で市場経済の導入が進んだり、国内でもさまざまな規制が緩和されたりしているのはまさにそのためです。

■金融市場での規制緩和

たとえば、私が関心を持っている金融市場でいえば、銀行に対する規制があります。銀行は預金という通貨を創造するという重要な機能があるため、さまざまな規制が課されてきました。そしてこのような規制は銀行の行動を制限する一方で銀行が破綻することを防ぎ、私たち消費者をも守ってきましたし、この規制の下で六〇年代に日本は高い経済成長も実現してきたのです。

しかし、規制があると自由な取引が制限されるため、市場メカニズムが充分に機能せず、資源配分上は好ましくありません。そのような理由から、金利など金融機関に課されてきた規制も、七〇年代以降は順次緩和されてきたのです。

卒業生と研究室で

■規制緩和と新たな課題

ところが、規制の緩和により競争が激しくなると銀行の破綻が生じるかもしれません。その場合にも金融システムが機能不全に陥らないように、規制を緩和すると同時に金融システムを守るための新たな工夫が必要になります。

また、銀行業以外でも規制が緩和された産業では、企業活動が自由になる一方で、監督が不充分になる可能性もあるため、企業や経営者を規律付けるための新たなメカニズムを考案することも重要な課題となります。

細胞生物学教室

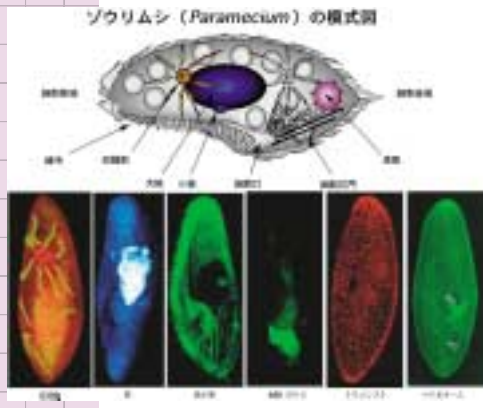
理科教育講座・助教授
石田　正樹

■原生動物と細胞生物学

原生動物は単細胞生物であります。一般の方がこの名前を聞くと、おそらく最初に思い出すものが、ゾウリムシかアメーバでしょう。私の専門は、そのゾウリムシを用いた細胞生物学です。

単細胞と云う言葉は、私のように単純な思考をするヒトに対してしばしば使われますが、原生動物はその実、分化の進んだヒトの細胞と比べても究めて多才であります。なぜならば、たった一つの細胞で激変する環境に適応して生きているからです。それゆえ、高等動物では埋もれている大切な機能を、より多く発現しています。

私はこれまでに、ヒトに例えると神経系、筋・骨格系、消化器系、循環・泌尿器系、生殖器系にあたる機能に関する研究をしてまいりましたが、この多才な細胞を用いて、全ての生物に共通する基本的な現象をより多く解明したいと考えています。



■石田研究室の始動

私が奈良教育大学へ赴任したのは、昨年のひな祭りの日です。研究室を頂いて、まず第一に印象的だったのは、研究室の窓から見える満開の李の花と、その奥に広がる里山のような自然でした。

この大学での私の第一歩は、もちろん独自の研究の始動と共に、我が大学の素晴らしさを伝えることから始めたいと考えています。この大学は、本当に自然に恵まれた大学です。キャンパス自体が教材になる自然に恵まれた大学は国内でも他にはありません。生物の教官としては、キャンパスの生物図鑑を作成し、ホームページ上で公開、広く一般の方々にも興味を持っていただき、この大学に多くの人を集めたいと考えています。

共に学び共に育つ

学校教育講座・助教授
横山真貴子

■絵本を通して子どもを見る

研究室の本棚には、「ぐりとぐら」をはじめ、「ノンタン」「ちいさいモモちゃん」シリーズなど、絵本が並んでいます。私の主要な研究テーマは、乳幼児の発達と絵本のかかわりです。絵本を核とした発達研究や保育研究を行っています。

■問う力を育む

ゼミでは、絵本に限定せず、保育者を目指す学生さんたちと一緒に、子どもの発達と教育について、幅広く取り組んでいます。

卒業論文も「男性保育者の存在意義」といった保育者論や「食育」「飼育」「手遊び」「砂場遊び」など、多様です。深めたいテーマを見つけることも、卒論の目的のひとつだと考えています。

■保育者としての得意分野作り

卒論作成を通して、保育者としての得意分野の基盤も育んでいきたいと考えています。近年、子どもを取り巻く環境の急激な変化に伴い、保育者の専門性が問われています。保育者の資質向上の具体策の一つが、得意分野の育成です。

「好き」なこと、「気になる」ことを、自ら問いを立て、深めていく。論文では、保育案の提案や教材の作成など、実践に結びつく展開を期待します。論文の作成が、卒業後すぐに保育現場に羽ばたく学生さんたちのひとつの自信となることを願っています。

■語り合い　学び合う

ゼミの場は、語り合い、学び合う場でもあります。絵本を核に研究を進める私ですが、ゼミ生の広範な興味は、視野を広げ、学びを開いてくれます。一人の問いが、参加者全員の問いとなり、学びが紡がれていきます。共に学び、共に育ち合う。そうした研究室を目指しています。